

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：看護学科

資格：助教

氏名：大畑 裕可

研究分野	研究内容のキーワード
臨床看護学	高齢者 フレイル 筋骨格系疾患 家庭血圧 介護予防 疫学
学位	最終学歴
博士（保健学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 成人看護学Ⅱ（急性期） 演習補助	2024年4月～2024年5月	成人（急性期）看護学Ⅱの演習指導を担当した。看護過程の演習ではグループワークのサポート、学びの発表の進行支援を行った。
2. 統合看護学実習 実習指導	2023年8月～2023年9月	統合看護学実習の地域連携実習において実習準備および指導を担当した。
3. 成人看護学(急性期)実習 実習指導	2023年6月～2024年5月	成人(急性期)看護学実習の実習指導を担当した。
4. 解剖生理学に関する講義	2023年4月～2024年9月	看護学生に対して、解剖学（主に脳、脊髄、内分泌の範囲を担当）の講義を実施した（計48時間）。
5. 看護研究に関する講義	2023年4月～2023年7月	看護専門学校3年生に対して、看護研究の講義を担当した（計12時間）。
6. 看護師国家試験対策に関する講義	2022年7月～2025年3月	看護系大学の4年生に対し、看護師国家試験対策の講義を担当した（計84時間）。また、大学1年生、2年生に対し、模試解説セミナーを実施した（計6時間）。
7. 基礎看護学領域 実習指導補助	2021年2月～2021年3月	基礎看護学の実習において、学生5名の実習指導補助を担当した。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 看護師免許	2017年4月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 地域在住高齢者におけるフレイルの関連要因に関する検討	単	2025年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 博士論文	<p>フレイルの予防や要介護状態への移行予防は高齢者のQOLの維持向上、健康寿命延伸の観点から非常に重要である。本研究では、フレイルの関連要因として筋骨格系疾患および血圧に注目し、これらとフレイルとの関連を検討した。</p> <p>研究1では、フレイルのリスク因子を筋骨格系疾患の有無や年代別に検討した。フレイルのリスク因子は、筋骨格系疾患のない70歳では経済状況にゆとりがないこと、筋骨格系疾患のある70歳では高BMIであった。80歳では、筋骨格系疾患の存在がフレイルのリスク因子であった。</p> <p>研究2では、高齢者における適切な血圧コントロールに関する理解を深め、血圧管理における臨床的および政策的な示唆を得ることを目的に、診察室血圧と家庭血圧、その差をフレイル群間で比較した。その結果、降圧薬服用中のフレイル高齢者において朝の家庭収</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
2. 地域在住高齢者における身体的フレイル進展に影響するロコモティブシンドロームの意義	単	2022年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻修士論文	<p>縮期血圧が高いことが明らかとなり、また朝の家庭血圧は診察室血圧を上回っていた。将来の脳心血管疾患の発症予防や健康維持において、降圧薬服用中のフレイル高齢者は特に家庭血圧測定が重要である可能性が示唆された。</p> <p>医療・介護従事者や地域で暮らす高齢者の健康に関わる自治体職員は、フレイルの発症予防・要介護状態への移行予防を拡大していくための具体的なアプローチ戦略として、筋骨格系疾患の有無や年代に注目して介入方法を個別化すること、降圧薬服用中のフレイル高齢者には特に家庭血圧測定の推奨を行うことが効果的である可能性がある。</p> <p>地域在住高齢者において、身体的フレイルに陥る要因をロコモティブシンドローム（ロコモ）の有無や年代別に明らかにすることを目的とした。ロコモあり群の方が、身体的フレイルに該当する者の割合が高かった。ロコモの有無別にみた身体的フレイルの関連要因は、ロコモなしでは年齢や低い身長、ロコモありでは年齢、低い身長、運動習慣なし、外出頻度が少ない、低Alb値であった。</p>
3 学術論文				
1. Office and home blood pressure and their difference according to frailty status among community-dwelling older adults: the NOSE study (査読付)	共	2025年2月	Hypertension Research. 48(4), 1389-1398	<p>地域在住高齢者を対象に、降圧薬服用の有無で層別化し、診察室血圧、家庭血圧、その差をフレイル群間で比較することを目的とした。能勢健康長寿研究に参加した64歳以上の高齢者を分析対象とした。本研究は横断研究である。能勢健康長寿研究の調査会場で医療従事者が測定した血圧を診察室血圧、対象者が自宅で起床後1時間以内・就寝前に測定した血圧を家庭血圧と定義した。降圧薬服用の有無で層別化し、血圧値をフレイル群間で共分散分析を用いて比較した。418人のうちフレイルは28人(6.7%)であった。降圧薬服用中のフレイル高齢者は、フレイルのない者と比較して朝の家庭収縮期血圧が高かった。診察室血圧と朝の家庭血圧の差はフレイルの有無によって異なり、特に降圧薬服用中のフレイル高齢者では、朝の家庭血圧が診察室血圧を上回っていた。将来の脳心血管疾患の発症予防や健康維持において、降圧薬服用中のフレイル高齢者は特に家庭血圧測定を行い、血圧管理を行うことが重要である可能性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ収集，データ分析，執筆，まとめ 共著者：Yuka Ohata, Mai Kabayama, Kayo Godai, Michiko Kido, Yaya Li, Yuya Akagi, Naoko Murakami, Hiroko Yoshida, Mariko Hosokawa, Yuka Tachibana, Yuka Fukata, Chihiro Anzai, Kaoru Hatta, Yurie Maeyama, Arisa Wada, Sumiyo Hashimoto, Hiromi Hatanaka, Makiko Higashi, Takeshi Kikuchi, Keiji Terauchi, Fumie Matsuno, Sho Nagayoshi, Kei Asayama, Takayoshi Ohkubo, Hiromi Rakugi, Yasuharu Tabara, Kei Kamide.</p>
2. Sex differences in reduction of trunk muscle mass related to falls and cognitive function during the COVID-19 pandemic in older adults (査読付)	共	2024年10月	Geriatrics & Gerontology International. 24(10), 1060-1066	<p>COVID-19パンデミックが高齢者の体組成や活動に与える影響、身体機能との関連を検討することを目的とした。クリニックで健診を受けた75歳以上の67名（平均年齢81±2歳、女性66%）を対象とした。身体機能、口腔機能、認知機能のデータは、後期高齢者質問票を用いて収集した。2018年および2019年のデータをパンデミック前、2021年および2022年のデータをパンデミック中と定義した。分析の結果、体重、握力、骨格筋指数は2018年から2022年まで変化が見られなかったが、体幹筋肉量指数（TMI）は有意に低下していた。男性では2022年と2018/2019年の間にTMIに差が見られ、女性では2021年と2022年の間に有意差が見られた。パンデミック前と比較して、パンデミック中にTMIが低下したのは男性のみであった。</p> <p>本人担当部分：データ分析 共著者：Masahiro Nagano, Mai Kabayama, Yuka Ohata, Michiko Kido, Hiromi Rakugi, Kei Kamide</p>
3. Risk Factors Predicting Subtypes of Physical Frailty Incidence	共	2024年6月	Geriatrics & Gerontology International. 24(8), 797-805.	<p>地域在住高齢者において、筋骨格系疾患(MSD)の有無と年齢層で層別化した身体的フレイルのリスク因子を明らかにすることを目的とした。302人の参加者のうち、110人(36.4%)がMSDを有していた。MSDを有する者は、有さない者に比べ、3年後に身体的フレイルを有する割合が有意に高かった。対象者全体を対象とした場合、年齢が</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Stratified by Musculoskeletal Diseases in community dwelling older adults: The SONIC Study (査読付)				身体的フレイルのリスク因子であった。年齢階級別にみると、70歳では、MSDなしでは経済状態に不満があることがリスク因子であり、MSDありではBMIが高いことがリスク因子であった。年齢は全体として身体的フレイルのリスク因子であったが、他のリスク因子はMSDの有無や年代によって異なっていた。 本人担当部分：データ収集，データ分析，執筆，まとめ 共著者：Yuka Ohata, Kayo Godai, Mai Kabayama, Michiko Kido, Yuya Akagi, Winston Tseng, Marlon Maus, Hiroshi Akasaka, Yoichi Takami, Koichi Yamamoto, Yasuyuki Gondo, Saori Yasumoto, Madoka Ogawa, Ayaka Kasuga, Kiyooki Matsumoto, Yukie Masui, Kazunori Ikebe, Yasumichi Arai, Tatsuro Ishizaki, Kei Kamide
4. Factors influencing the communication of home blood pressure measurement in community-dwelling older adults: the NOSE study (査読付)	共	2024年4月	Journal of Hypertension, 42 (4), 694-700	地域在住高齢者における家庭血圧測定 (HBPM) の継続に影響を及ぼす因子を明らかにすることを目的とした。437名を分析対象とした。このうち120人 (27.5%) がHBPMを中止した。多変量解析において、HBPM中止と有意に関連した因子は、女性 (ハザード比0.55; 95% CI 0.32-0.95), 喫煙歴 (ハザード比1.69; 95%CI 1.02-2.80), 運動習慣 (ハザード比0.51; 95%CI 0.30-0.85), MoCA-Jスコア (ハザード比0.93; 95%CI 0.88-0.98), フレイル (ハザード比3.31; 95%CI 1.50-7.29) であった。 本人担当部分：データ収集，まとめ 共著者：Arisa Wada, Mai Kabayama, Kayo Godai, Michiko Kido, Yuka Ohata, Naoko Murakami, Yuko Nakamura, Hiroko Yoshida, Sumiyo Hashimoto, Makiko Higashi, Hiromi Hatanaka, Takeshi Kikuchi, Keiji Terauchi, Sho Nagayoshi, Fumie Matsuno, Noboru Shinomiya, Kei Asayama, Takayoshi Ohkubo, Hiromi Rakugi, Yasuharu Tabara, and Kei Kamide
5. フレイル健診における後期高齢者質問票の有用性—診療所における活用例— (査読付)	共	2022年4月	日本老年医学会雑誌, 59(3), 360-370	後期高齢者質問票を実地臨床の場で活用するため、実測値で判定されたサルコペニアと後期高齢者質問票との関連を検討した。171名の後期高齢者健診を受けた者を対象とした。後期高齢者質問票は、その各種項目においてサルコペニアと関連したことから、簡易スクリーニングとして活用できることが示唆された。 本人担当部分：データ分析，まとめ 共著者：長野 正広, 樺山 舞, 大畑 裕可, 楽木 宏実, 神出 計
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. データに基づく介護美容の有効性の検証 -ネイル施術による要介護認定高齢者への身体・認知・社会的側面への影響-	共	2024年6月	第25回日本認知症ケア学会大会 (東京都)	ネイルを含めた美容施術が要介護高齢者へもたらす身体・精神・社会的側面への影響を明らかにすることを目的とした。65歳以上の要介護認定を有する高齢者54名を対象とした。介入群には週1回半年間美容施術 (ハンド・フットトリートメント、ネイルいずれか) を実施した。対象者を介入群と対照群に割り当て、身体・精神・社会的側面の測定指標を介入開始時と介入終了時点で比較した。結果、要介護認定を有する高齢者に対する複合的な美容施術は、リハビリへの参加頻度の上昇、認知機能の維持、認知症高齢者の生活のしやすさに影響を与える可能性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、発表資料作成、まとめ 共著者：渡邊文三朗, 大畑裕可, 大倉武彦, 中島雅紘, 村田有加, 中浜崇之, 山際聡
2. 地域在住高齢者におけるフレイルカテゴリー間の診察室血圧と家庭血圧の差 - NOSE Study-	共	2024年5月	第60回日本循環器病予防学会学術集会 (東京都板橋区)	地域在住高齢者において、診察室血圧、家庭血圧、その差をフレイル群間で明らかにすることを目的とした。419名を対象とした結果、降圧薬使用中のフレイル高齢者は、朝に家庭で測定した収縮期血圧値が高く、その値は診察室血圧よりも高い可能性が示唆された。降圧薬使用中のフレイル高齢者は、診察室だけでなく家庭でも血圧も測定し、より適切な血圧のコントロールを行うことが望ましい。 本人担当部分：データ収集，データ分析，発表資料作成，発表 共同発表者：大畑裕可, 樺山舞, 呉代華容, 和田ありさ, 木戸倫子, 浅山敬, 大久保 孝義, 楽木宏実, 田原康玄, 神出計

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. Difference between Office and Home Blood Pressure by Frailty Category among Community-dwelling Older Adults-NOSE study	共	2024年3月	EAST ASIAN FORUM OF NURSING SCHOLARS (Hong Kong)	地域在住高齢者において、診察室血圧と家庭血圧の差をフレイル群間で明らかにすることを目的とした。419名を分析対象とした。診察室血圧と家庭血圧の差はフレイルカテゴリーによって異なる傾向があり、フレイルなしの者では診察室血圧が家庭血圧よりも高かった。一方、降圧薬を使用しているフレイル高齢者では、診察室血圧より家庭血圧の方が高かった。 本人担当部分：データ収集，データ分析，発表資料作成，発表 共同発表者：Yuka Ohata, Mai Kabayama, Kayo Godai, Arisa Wada, Michiko Kido, Kei Asayama, Takayoshi Ohkubo, Hiromi Rakugi, Yasuharu Tabara, Kei Kamide
4. 地域在住高齢者におけるフレイル分類別の家庭血圧値、季節変動	共	2023年9月	第45回日本高血圧学会（大阪市）	地域在住高齢者を対象として、家庭血圧値や血圧変動、季節変動をフレイル群間で比較することを目的とした。分析対象者は418名であり、平均年齢は72.8歳、男女比は女性が253人(60.5%)であった。結果、フレイル群は収縮期血圧値が有意に高く、冬の血圧が夏より高い季節変動を認めた。 本人担当部分：データ収集，データ分析，発表資料作成，発表 共同発表者：大畑裕可，呉代華容，和田ありさ，木戸倫子，浅山敬，大久保孝義，楽木宏実，田原康玄，神出計
5. Home Blood Pressure levels by Frailty Classification, Seasonal Variation among Community-dwelling Older adults-NOSE study	共	2023年9月	Proceedings of the 2023 IDACO/IDHOCO/IDCARS/UPRIGHT-HTM Osaka Consortium（大阪市）	地域在住高齢者において、家庭血圧値と季節変動をフレイル群間で比較することを目的とした。418名を対象とした結果、高血圧を有する者では、フレイル群はフレイルなし群と比較して収縮期血圧値が有意に高かった。高血圧のない者においては、血圧値と血圧変動指標はフレイル群間で有意な差はみられなかった。 本人担当部分：データ収集，データ分析，発表資料作成，発表 共同発表者：Yuka Ohata, Kayo Godai, Mai Kabayama, Arisa Wada, Michiko Kido, Kei Asayama, Takayoshi Ohkubo, Hiromi Rakugi, Yasuharu Tabar, Kei Kamide
6. 行動制限のないCOVID-19流行下における後期高齢者の身体指標・機能の変化	共	2023年6月	第65回日本老年医学会学術集会（横浜市）	後期高齢者を対象とし、COVID-19による行動制限の前後における身体組成や身体機能の変化を明らかにすることを目的とした。2018年から5年連続でAクリニックで健診を受けた55名を分析対象とした。2018～2019年をCOVID-19流行前、2021～2022年をCOVID-19流行後として比較したところ、男性では体幹筋肉量係数が有意に減少していた。女性ではこのような変化はみられず、コロナ禍による影響は男女で異なることが示唆された。 本人担当部分：データ分析，結果まとめ 共同発表者：長野正広，樺山 舞，大畑裕可，木戸倫子，楽木宏実，神出 計
7. Association between Skeletal Muscle Mass and Blood Pressure Decline over a Five-Year Period for Community-dwelling Older Adults	共	2022年10月	The 29th Scientific Meeting of the International Society of Hypertension (Kyoto city)	地域在住高齢者において、四肢の骨格筋量(SMI)と5年間にわたる収縮期血圧値(SBP)の変化を、降圧薬使用有無と投与量によって層別化して明らかにすることを目的とした。118名を対象とした結果、平均SBPは低SMI群で5年間で有意に低下していた。 本人担当部分：データ収集，データ分析，発表資料作成，発表 共同発表者：Yuka Ohata, Mai Kabayama, Michiko Kido, Kayo Godai, Masahiro Nagano, Kei Kamide
8. 地域在住後期高齢者における筋肉量低下と血圧値との関連	共	2022年6月	第10回臨床高血圧フォーラム（札幌市）	地域在住の後期高齢者において、降圧薬使用有無別に骨格筋量と血圧値との関連を明らかにすることを目的とした。Aクリニックで後期高齢者健診を受けた171名を分析対象とした。重回帰分析の結果、全体、降圧薬使用者で骨格筋量の低下と収縮期血圧低値との間に有意な関連がみられた。 本人担当部分：データ収集，データ分析，発表資料作成，発表 共同発表者：大畑裕可，樺山舞，木戸倫子，長野正広，神出計
9. コロナ禍における後期高齢者の身体指標・機能の変化	共	2022年6月	第64回日本老年医学会学術集会（大阪市）	COVID-19流行前後で、身体組成・身体機能の変化や、後期高齢者健診質問票で評価したフレイル・各種疾患や検査値との関連を検討することを目的とした。96名を対象とし、男女別の解析を行った結果、男性でCOVID-19流行前後で体重と体幹筋肉量係数が有意に減少していた。さらに、精神心理的フレイルありの者はなしに比べて体幹筋肉量係数が有意に減少していた。女性では、社会的フレイルあ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
10. 地域在住高齢者において骨関節疾患が将来の身体的フレイルへの進展に及ぼす影響の年代別の検討-SONIC研究-	共	2021年11月	第8回 日本サルコペニア・フレイル学会（豊中市）	<p>りの者はなしに比べて体重の減少が有意に大きかった。コロナ禍におけるフレイル・サルコペニアの悪化予防には男女で異なる対応が必要で、男性では体幹筋肉量、女性では体重の減少に留意することが重要と考えられた。</p> <p>本人担当部分：データ分析、結果まとめ 共同発表者：長野正広，樺山 舞，大畑裕可，木戸倫子，樂木宏実，神出 計</p> <p>地域在住高齢者において、年代別、骨関節疾患の有無別に3年後の身体的フレイルへの移行とその関連要因を明らかにすることを目的とした。3年後にフレイルへ移行した割合は70歳よりも80歳で有意に高く、さらに骨関節疾患ありの者の方なしの者よりも高かった。うつ傾向、糖尿病、経済状況にゆとりなし、低い身長（男性）、歩行速度低値が70歳におけるフレイル移行の関連要因であった。血清総蛋白低値、歩行速度低値が80歳におけるフレイル移行の関連要因であった。</p> <p>本人担当部分：データ収集、データ分析、発表資料作成、発表 共同発表者：大畑裕可，樺山舞，呉代華容，赤坂憲，権藤恭之，増井幸恵，新井康通，石崎達郎，樂木宏実，神出計</p>
11. 骨関節疾患を有する地域在住高齢者における身体的フレイルに陥る要因の検討-SONIC研究-	共	2021年6月	第63回 日本老年医学会総会（オンライン）	<p>骨関節疾患を有する高齢者において、身体的フレイルに陥る要因を年代別に明らかにすることを目的とした。70歳991名、80歳948名、90歳237名を解析対象とした。ロジスティック回帰分析を行った結果、70歳では低身長と都会在住が、80歳では低身長、低ALB値、外出頻度が少ない、変形性関節症あり、要介護認定ありが、90歳では低ALB値、骨粗鬆症ありが身体的フレイルに独立して関連する因子であった。高齢者において、身体的フレイルと関連する要因には年代差があることが明らかとなった。</p> <p>本人担当部分：データ収集、データ分析、発表資料作成、発表 共同発表者：大畑裕可，樺山舞，呉代華容，赤坂憲，権藤恭之，増井幸恵，新井康通，石崎達郎，樂木宏実，神出計</p>
12. Health problems related to Internet addiction among Japanese undergraduates: a systematic review	共	2017年3月	EAST ASIAN FORUM OF NURSING SCHOLARS (Hong Kong)	<p>日本人大学生を対象とした系統的レビューによって、インターネット依存の割合およびインターネット依存に関連する健康上の問題を明らかにすることを目的として文献レビューを行った。</p> <p>10論文が本レビューに含められた。日本人大学生のインターネット依存傾向者の割合は、12.8-58.5%であり、睡眠の質の低下などの身体的問題と抑うつ症状などの精神的問題と有意に関連していた。医療者がインターネット依存者と接する時は、上記に示した健康上の問題に留意しながら関わっていく必要がある。</p> <p>本人担当部分：文献検索、レビュー、まとめ、発表 共同発表者：Yuka Ohata, Mie Shiraiishi</p>
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. Association between Skeletal Muscle Mass and Blood Pressure Decline over a Five-Year Period for Community-dwelling Older Adults	単	2023年1月	2022年度国際共同研究推進プログラム 第3回大阪大学・UC Berkeley 合同WEBシンポジウム	<p>地域在住高齢者において、降圧薬使用と用量で層別化し、5年間の筋肉量の減少と血圧値との関連を明らかにすることを目的とした。その結果、骨格筋量の低下と5年間の収縮期血圧(SBP)低下との間に独立した関連があることが明らかになった。SBPの長期的な変化は、低筋肉量のバイオマーカーとして有用かもしれない。</p>
2. Significance of Bone and Joint Diseases in the Progression of Physical Frailty in Community-	単	2022年3月	2021年度国際共同研究推進プログラム 第2回大阪大学・UC Berkeley 合同WEBシンポジウム	<p>地域在住高齢者における身体的フレイルのリスク因子を年齢別、骨関節疾患の有無別に明らかにすることを目的とした。70歳の骨関節疾患なしの者は抑うつ傾向、経済的不満足、糖尿病が身体的フレイルのリスク因子であった。70歳の骨関節疾患ありの者は、BMIが高いことがフレイルのリスク因子であった。全対象者において、ベースライン時の歩行速度は身体的フレイルと強く関連していた。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
dwelling Elderly People 3. Factors that Cause Physical Frailty in Community-Dwelling Elderly people with Bone and Joint Disease : SONIC Study	単	2021年1月	2020年度国際共同研究推進プログラム 第1回 大阪大学・UC Berkeley 合同WEBシンポジウム	骨関節疾患を有する高齢者において、身体的フレイルの関連要因を年代別に明らかにすることを目的とした。高齢者では年代によって身体的フレイルに関連する因子に違いがみられた。70歳では、骨関節疾患があっても身体的フレイルになりやすいわけではなく、運動や栄養のような一般的な活動でフレイルを予防できることが示唆された。80歳、90歳では骨・関節疾患の関与が強いことが明らかになった。
6. 研究費の取得状況				
1. 「社会と知の統合」を実現するイノベーション 博士人材フェローシップ (2022～2024年度)	単	2022年4月	大阪大学フェローシップ創設事業	研究費年額40万円 (2022年度), 研究費年額10万円 (2023年度), 研究費年額20万円 (2024年度)
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			